

焼柿から 市田柿へ改称

〔東京、名古屋、大阪の市場へ進出〕



県立農事試験場 下伊那分場の開設

明治時代に入り、元旦の「歯堅め」の儀式が改暦によって廃止されたことや養蚕業の発達が重なって、飯田・下伊那地域の柿の生産額は減少傾向にありました。さらに、明治十年（一八七七）に始まった西南戦争によるインフレや、その後の明治政府のデフレ政策で農産物の価格が下落し、農家の生活は困窮していました。

そこで持ち上がったのが、伊那郡立農事試験場の設立です。明治二十八年（一八九五）に、上郷村（現在の飯田市上郷）に開設されました。その後、上飯田村（現在の飯田市東野）に移転し、飯田測候所が併設されるなど、規模を拡張しながら研究が続けられました。残念ながら明治三十六年（一

九〇三）に廃止となっています。

しかし、伊那谷は長野県内でも独自の気候風土にあるため、農業試験場開設を要望する声は大きく、大正十五年（一九二六）に市田村（現在の高森町）に県立農事試験場下伊那分場（現在の長野県南信農業試験場）が完成しました。園芸部長となつた小太刀文作技手は、梨、リンゴ、桃、柿などの品種試験を積極的にを行い、飯田・下伊那地域が全国有数の果物生産地へ躍進するきっかけになりました。



開設当時の県立農事試験場下伊那分場（県南信農業試験場所蔵）



上沼正雄が開墾した菰山神社上の「寺山」の柿園跡

市田柿に 改称し中央へ進出

明治二十二年（一八八八）に行われた「下市田柿樹調査」の記録には、下市田村内の柿樹数は七百二十八本（うち甘柿二百四十四本、渋柿五百四十四本）とあり、渋柿の種類には、焼柿（二百四十二本）、渋柿（二百四十七本）、ハチ谷（十七本）などがあげられています。下市田村の戸数は三百二十二戸でしたから、各戸に平均二本の柿の木があったこととなります。多くは庭や土手、畦に植えられて、自家用で消費されていたようです。そんな中、二章でも紹介したように、大正初期、上沼正雄は菰山神社の上に広がる約二ヘクタールの斜面を開墾し、焼柿の苗木

を二百本植えたといえます。そして、大正十年（一九二二）、橋都正農夫が焼柿から「市田柿」への名称変更を県に申請し、酒井安を団長とする下市田区壮年団の事業として、東京、名古屋、大阪の各市場へ市田柿を出荷しました。

下伊那郡の出品は五十四点）で、甘柿二十六種、渋柿三十八種に分類して調査が行われました。その結果、優良品種には、甘柿十三種、渋柿十種の計二十三種が選ばれ、焼柿（市田柿）は、用途別「白柿用（干柿）」の優良品種に決定しました。また、優良品種の出品者として、市田村在住の羽生茂一、山岸鉄造、木村庄蔵の三人が入選しました。

柿品種調査展覧会に 市田村の三人が入選

大正十三年（一九二四）十一月、長野県立農事試験場と日本園芸会長野県支会の主催で「長野県柿品種調査展覧会」が開かれました。これは、明治四十一年（一九〇八）から四十四年（一九二二）にかけて農商務省農事試験場園芸部が行った全国の柿を対象にした調査研究をもとに、長野県内の柿の優良品種を調査・決定し、普及させるために開催されたものです。出品された果実のなかから良種を選抜し、さらに生産樹の病害虫の抵抗性などを調査した上で優良種が決められました。

出品された柿果は全六百八十五点（うち



大正13年（1924）に開かれた「長野県柿品種調査展覧会」で焼柿（市田柿）の優良品種に入選した3人。左から、羽生茂一、山岸鉄造、木村庄蔵

なるほど!! 市田柿 ⑤

明治・大正は養蚕の時代

明治時代に入り、諸外国との貿易が始まると、商品作物として収益の高い養蚕業は急速に広がりました。長野県では、春蚕のほかに夏秋蚕の飼育を増やすことで養蚕業が発展し、水田を桑園に変える農家も増え、明治十年代末には府県ごとの繭産額で全国二位になっています。しかし、明治初期から昭和初期にかけて発展した養蚕業は、昭和四年（一九二九）の世界大恐慌による暴落やアメリカでの人絹工業の発達の打撃を受け、昭和五年（一九三〇）をピークに衰退へと向かいます。

飯田・下伊那地域でも養蚕は主力産業でしたが、昭和初期には、養蚕に変わる次の作物として果樹栽培に目が向けられるようになりました。昭和四年二月、市田小学校において、市田村、下伊那郡農会、県農業試験場主催の「果樹普及講演・講習会」が開催されました。講師として招かれた橋都正農夫（下伊那郡農会長）は、低迷する養蚕業に変わる果樹栽培の有望性を説いたといま

主要物産調（大正15年 市田村）

種別	数量	価格	総価格に占める割合
繭	93,607斤	720,895円	72%
米	6,781石	238,777円	24%
麦	1,554石	20,032円	2%
蚕種	9,600枚	14,400円	蚕種～煉瓦の 合計が2%
農蚕具	400台	4,900円	
瓦	30,300枚	2,250円	
乾柿	2,500斤	1,800円	
煉瓦	50,000枚	1,500円	
計		1,004,804円	

（高森町史より作成）